

かささぎ通信 第156号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2026年 2月 13日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

2026年1月の「森三郎の作品を読む会」では、「姉」(『銀河』1947年4月号)を読みました。

「姉」は『銀河』第二巻第四号(1947.4)に初めて、掲載されました。前回の「城下町」に続いて戦後発表された二作目の作品です。

『銀河』は1946年10月号から49年8月号まで新潮社から刊行されました。編集顧問 山本有三の方針により、左横組み、人名や地名はカタカナ表記です。今回読んだ「姉」の場合も作家名「モリ・サブロウ」画家名「タカハシ・クニトシ」はカタカナ表記で、本文中の登場人物の名前も「サンヤ・ゴロウ君・アラカワ先生・オオタ君」となっています。さらに本文中にふり仮名は一切使われていませんでした。『赤い鳥』の時代の作品に総ルビが振られていたことを考えると、画期的な編集方針です。「耳で聞いて分る日本語で話す。耳で聞いて分る日本語で書くといふことが大事」であるという山本の考えが、この児童向けの雑誌に生かされています(参考:「ふりがな廃止論とその批判」のまえがき)『作家の自伝 48山本有三』1997、『大正・昭和の「童心」』と山本有三』2005)。ただし、その後、児童文学者協会編『日本児童文学選 年刊第二集』(1950.1)に掲載された「姉」は縦書きの通常の表記で、人物の名前も「三也・五郎君・…」と漢字表記で文章にも校正の跡が見られます。刈谷市教育委員会編『森三郎童話選集 かささぎ物語』(1995)所収の「姉」は『銀河』所収の同作を縦組みの編集にしています。

「姉」は小学校五年のサンヤの姉が結婚する日のことを描いた作品です。当時の嫁入りの様子がよくわかります。家で花嫁さんの姿になって、お仲人さんと両親と一緒に車に乗って、夜にお婿さんの家で行われる結婚式に向かいます。家を出る前には、お仏壇に線香をあげ、ご先祖様にお別れを言う様子、花嫁さんを一目見ようと家

の前に集まって見送る近所の人達の様子、いつもとは違って、何となくよそ行きの両親の様子など、ハレの日の大人たちの情景が浮かび上がってきます。

サンヤが三時ころ急いで学校から帰ってきた時、姉さんはもうお嫁さんの支度をして椅子に座っていました。きのうまでの姉さんとは別な人のようにきれいな姿をみて、サンヤの頭に浮かんでくるのは、姉さんをからかって遊んだような思い出ばかりです。姉さんを乗せた自動車の運転手台に乗せてもらって、学校までのわずかな距離をサンヤも一緒にいきます。降りる時の、

「ねえさんさよなら」と言いたかったのに、なぜか言えませんでした

という表現には、サンヤの心の叫びがうかがえます。「ねえさんはよその他人になってしまったのでしょうか」と、せつない気持ちちが伝わってきます。

作者の森三郎には十二、三歳年の離れた姉がいました。尋常小学校四年生(1930年)のころ、姉は刈谷の隣町の人と結婚し、大阪に所帯を持ちました。夏休みになると、兄の銚三と一緒に大阪の姉のところへ遊びに行つて、近所の子どもと遊んだりしています。三郎は姉を結婚後もよその人ではなく以前と同じように慕っています。「姉」には小学校唱歌「スキー」(1942年、時雨乙羽作詞、平井康三郎作曲)が出てきますから、三郎の実体験の年代とは違いますが、しかし終戦を前に刈谷に戻り、結婚し、子どもが生まれたころの三郎には、この家からお嫁に行つた姉の姿が懐かしく思い出され、「姉」創作の動機になつたのではないのでしょうか?

〈次回予定〉2026年3月13日(金)午後一時半~三時半

「年あけ証文」(『日本児童文学』7、1948年4月)

「あねさま人形」(『幼年童話集 帽子に化したクロネコ』1949年12月)